

黒船かわら版とそれ以前

富澤達三

はじめに

幕末期、日本近海に異国船が頻繁に接近するようになり、嘉永6（1853）年6月のペリー来航と翌年1月の再来航によって、江戸幕府は開国を余儀なくされる。ペリー来航による日本開国は支配階級のみならず、庶民にも一大事として受け止められ、関連する情報が積極的に収集された¹⁾ことが知られる。

ペリー来航に際しては、莫大な点数のいわゆるかわら版が残されており、その全貌はいまだ明らかでない。なお、一般的に使われている「かわら版」という語は明治時代以降になって定着した言葉であり、江戸時代は「読売（よみうり）」「一枚摺（いちまいずり）」「摺物（すりもの）」などと呼ばれていた。近年、火事場附・番附・役人附・引札・大小曆・一枚摺・数枚綴りや冊子仕立ての出版物・ビラ・チラシなど、墨色の単色摺りか朱や青といった若干色の摺り、手彩色程度にとどまった印刷物を、一括して「摺物」²⁾と総称することが多くなっている。

1. 幕末期のかわら版

幕末期には、違反出版物であるかわら版³⁾が大量に出版された。かわら版の嚆矢は大坂夏の陣を描いたものであるともいわれるが、これは後年の記念出版物ではないかとする説が有力であり、その信憑性は近年疑問視されている。⁴⁾かわら版研究家の中山栄之助氏はかわら版の定義として「①ニュース性を持つ、②有料である、③即製に摺られた、④無届である」と指摘し、これらがかわら版の特徴としてしばしば引用される。これらに加え、「版形の多様さ」「紙質の悪さ」も特徴として指摘できる。⁵⁾

時節めいた噂を出版物とし、不特定多数の人々に売りさばくことは幕府によって堅く禁じられていたが、幕末期になると、物の本・軟派本を問わず、莫大な量の出版物が氾濫する。違反出版物への検閲も次第に緩み、かわら版の出版も常化して出版量も増加の一途をたどったようである。

かわら版の題材は地震火事などの災害もの、敵討・心中といった事件もの、化物の出現・奇形児や多産児出生といった珍事奇談ものなど多岐にわたる。⁶⁾かわら版は検閲を無視し

¹⁾ (岩下 2000) 第一部四章に詳しい。

²⁾ 「摺物」の定義は、東京大学史料編纂所ホームページ「摺物データベース」トップページ、検索システム支援ページの第一項目「本目録（データベース）の性格」(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/shipso/suri/HELP/shelp1.html>)に詳しい。このほか(宮地 2000、2004)を参照した。

³⁾ 「かわら版」という用語の定着については(町田市立博物館 1984) 3-5頁、(グローマー 1995) 70-73頁を参照した。

⁴⁾ 大坂の夏の陣のかわら版の真偽については(北原 2003) 第一章で考察されている。

⁵⁾ かわら版の紙質、版型の多様さについては(富澤 2004) 第二章二節を参照のこと。

た出版物であるため、政治を諷した際どい作品が多いと一般的には考えられがちであるが、権力者の怒りを買う体制批判ものは極めて少ない。そのような政治風刺は、製作者の特定が可能な出版物でなく、匿名性が守られる落首や落書⁷⁾で行なわれた。

弘化～嘉永期（1844-54年）になると、善光寺地震（改化4＝1847年）や安政東海地震・南海地震（安政元＝1854年）など広範囲に及ぶ災害が起こり、「災害もの」かわら版が数多く残されたことが知られる。災害ものは、かわら版のなかでも一大ジャンルであり、図像と漢字仮名まじり文章で構成された画面で、災害発生に関するニュースが伝えられた。

たとえば火事を伝えたかわら版であれば、略地図に類焼場所が描かれ、被害の状況が文章で説明される。絵は拙く、類焼箇所や被害状況を伝えた文章情報も、一つの事件を大人数で取材する現代の新聞と比較すれば、正確さを欠いていたと推定されよう。だが、かわら版では「情報の正確さ」だけが求められたのであろうか。

かわら版は即製に作られた無検閲の商品であり、情報の正確さを保証できる出版物ではなかった。しかしながら、何がしかの真実を含んでいたメディアでもあった。例えば、火災を扱ったかわら版ならば「火事が起こった」という動かしがたい事実がなければ、そのかわら版は全くの虚報となってしまう。火事が確かに起こったという事実があり、発生場所、発生日時などといった、情報の核心部分が文章で伝わり、絵図によって被害の広がりイメージできれば、かわら版の商品的価値は保たれたのである。

地震についても同様で、現代とは比べ物にならない貧弱な通信網の下では、詳細かつ正確な情報は得られなかったから「いつどこで、どの程度の大きさの地震が起こったのか」という揺るぎない事実をつかみ、いち早く伝えることが、最も重視されたといえよう。かわら版のなかには虚報や、事実を著しく誇張・歪曲し、面白おかしく伝えた珍事奇談ものも多かったが、それらに比べ、災害ものかわら版は「全くのウソ」を書いていたのではなかった。そして誇張や娯楽的な側面は抑えられ、事実を伝えることが商品的価値を高めたから、真実度は比較的高いものであったと判断できよう。

このように、災害かわら版は不正確な情報で事実を伝えたメディアであったから、地震・火事についてより正確な情報を求める人々は、口づての情報や複数のかわら版を購入することなどで、情報を補ったと推測される。

2. 黒船来航を描いたかわら版

幕末期の奇想の浮世絵師として名高い歌川国芳は、反骨の画家でもあり、天保14（1843）年の錦絵（多色摺りの浮世絵版画）『源頼光公館土蜘蛛妖怪図』で老中・水野忠邦による天保改革を風刺したことで知られる。国芳はまた、江戸の事件を錦絵の題材とし、面白おかしく伝えることも得意としていた。⁸⁾しかしながら、時節めいた噂を出版物にし売りさばくことは、幕府により堅く禁じられ、貞享元（1684）年には禁令が出されている。そのため国芳の錦絵では、事件を戯画で遠まわしに伝えるなどの婉曲的な表現が使われた。

⁶⁾ かわら版の概説については（中山1974a、1974b）、『かわら版新聞 江戸・明治三百事件 I～IV』（平凡社1978）に詳しい。

⁷⁾ 落書・落首に関しては（吉原1999）を参照されたい。

⁸⁾（富澤2004）第三章「流行神の錦絵」参照。



図1 歌川国芳『浮世又平名画奇特』(個人蔵)

ペリー来航は江戸庶民にとって一大事件であり、国芳にとっても格好のネタとなったはずである。しかしながら、この大事件に関係する国芳の錦絵は、大津絵を題材とする『浮世又平名画奇特』⁹⁾(図1)が知られるのみである。本作はペリー来航後の、嘉永6(1853)年6月中旬に刊行されたため、江戸庶民は黒船の来航とそれに慌てる幕府上層部を諷した「判じもの」の錦絵ではないかと考え、巷では様々な浮説が飛び交ったという。しかしながら、この絵に何らかの風刺が隠されていたにせよ、それらの「判じ」は難解であり、容易に読み解けるものではなかった。

嘉永期には錦絵の検閲もやや緩み、従来は描くことのできなかった、江戸の時事的話題を扱った作品の出版も多少は可能になっていた。前述のように国芳はこの種の作品を得意とし、個性的な作品を残している。しかしながら、政治的な話題であるペリー来航をテーマにすることはやはり差し障りがあったようで、国芳といえども、明白にそれとわかる作品は残していない。

江戸庶民が『浮世又平名画奇特』の読み解きで盛り上がる一方、江戸市中ではペリー来航を題材とする膨大な種類の一枚摺(以下、黒船かわら版とする)が売られていた。いうまでも無く、すべてが無検閲の違反出版物である。黒船かわら版は少なくとも200種類以上が確認されており、黒船館(新潟県柏崎市)、了仙寺(静岡県下田市)、横浜開港資料館などのコレクションが知られている。とくに横浜開港資料館では、同館の所蔵する黒船関

⁹⁾『浮世又平名画奇特』の読み解きについては(南1997)184-195頁を参照した。

係かわら版の目録を公開する¹⁰⁾とともに、ペリー来航が幕末日本に与えた衝撃のみならず、地域社会へ及ぼした影響についても個別具体的に研究している。¹¹⁾

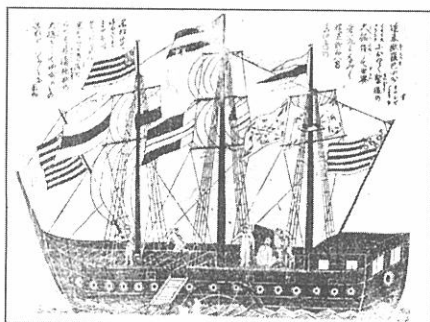
さて、斎藤多喜夫氏は黒船かわら版を、おおよそ以下のように分類する(図2)。

- ①黒船 ②御固 ③ペリーとその一行 ④応接風景 ⑤献上品・答礼品 ⑥風刺

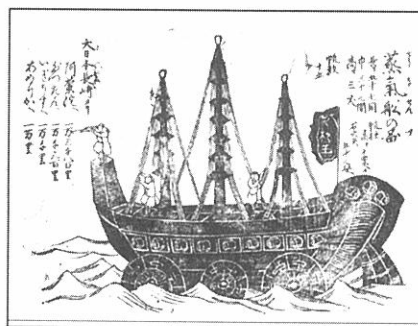
これらの分類をみると、黒船かわら版はペリー来航事件に関する、一連の経過に合致して出版されていったと考えられる。つまり、かわら版の出版は「黒船の接近」→「(黒船接近に対処する)御固」→「ペリー一行の上陸」→「一行への応接」→「献上品・答礼品(の授受)」→「(黒船来航事件への)風刺」といった、ペリー来航から横浜開港へと、数年間にわたる事件の推移を継続的に伝えていったのである。

黒船かわら版の画像分析に関しては、斎藤氏による興味深い考察がある。¹²⁾ 斎藤氏によれば、従来あった異国人や異国船のイメージを剽窃したのことが多いという。管見では、

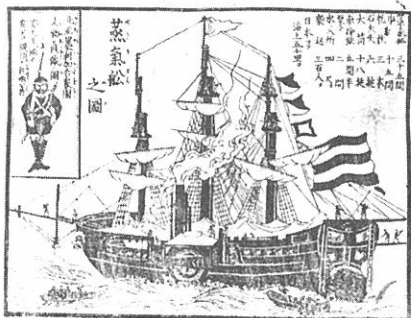
①黒船



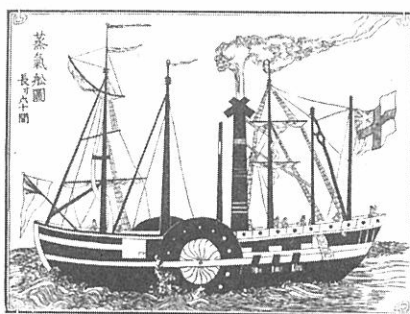
1. [北アメリカ城気船] (224×303)



2. 蒸気船の図 (260×320)



3. 蒸気船之図 (235×305)



4. 蒸気船図 長サ六十間 (229×284)

図2 横浜開港資料館所蔵、黒船かわら版

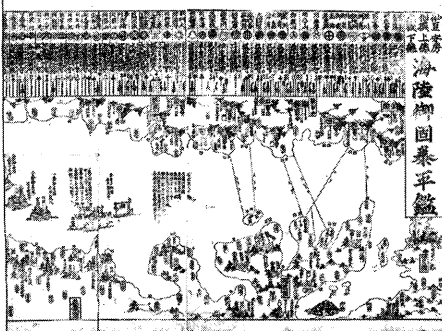
¹⁰⁾ (横浜開港資料館1997) 参照。

¹¹⁾ (横浜開港資料館2004) 参照。

¹²⁾ 黒船かわら版の類型分析については(斎藤1986、2004)に詳しい。

「①黒船」の図像では、画面中央部分に船の全体像を描いたものが多く、黒色の船体、三本の巨大なマスト、アメリカ国旗、推進用の外輪、白煙を噴く蒸気機関の煙突などがほとんどの図像で共通している（図2）。黒船の周囲には小船が、船上には乗員が描かれ、それらとの対比から船体の大きさが強調されている。図像情報を補う文字情報としては「黒

図2 つづき



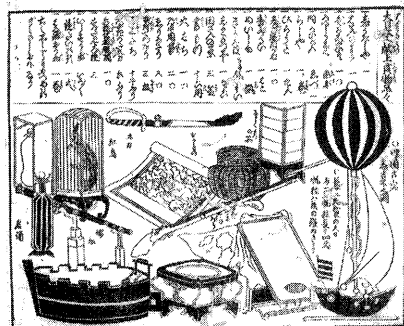
② 御固



③ ペリーとその一行



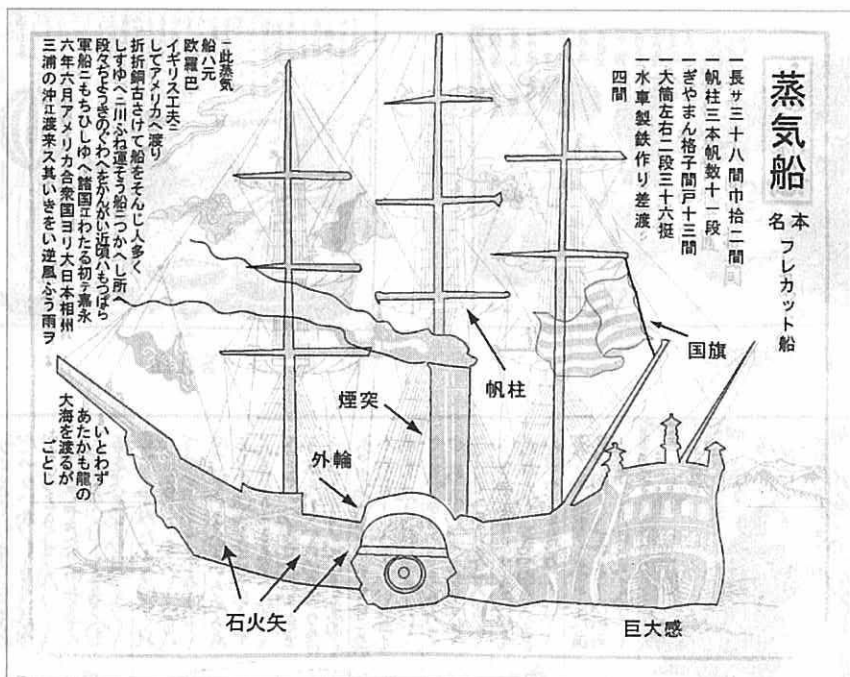
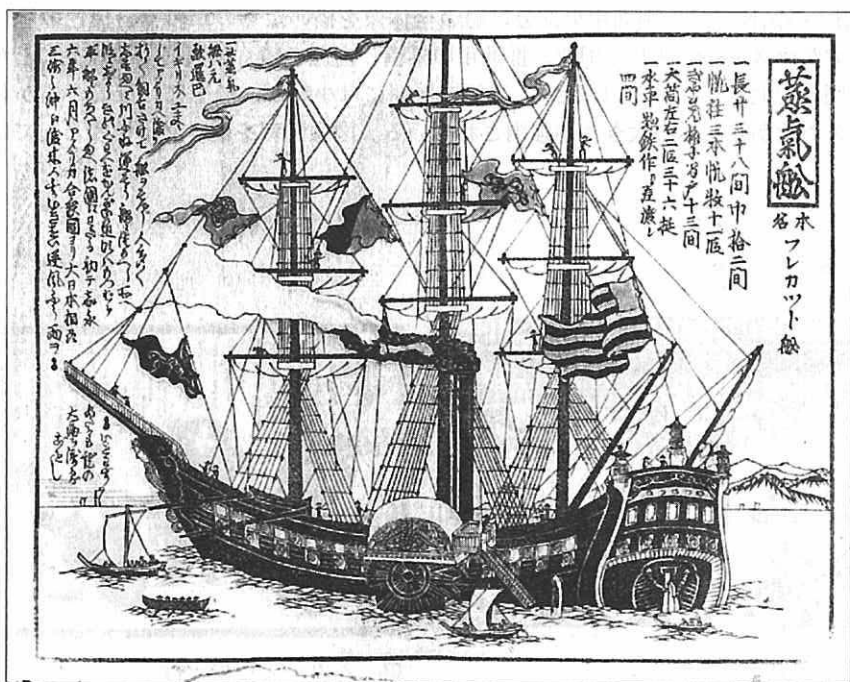
④ 応接風景



⑤ 献上品・答礼品



⑥ 風刺



国籍・色・巨大さ・武装（大砲）・帆柱の数・動力など、黒船に関する情報が不正確ながらも、盛り込まれている。

図3 「蒸気船 本名フレカット船」(238×315 mm) 横浜開港資料館蔵

船の全長」「巾」「帆柱の数」「船員数」「石火矢（大砲）の数」「外輪の直径」などの情報が書かれる（図3）。

図2①から⑥の、類型的な黒船かわら版の図像・正確さを欠いた文字情報からは、ペリー来航事件の概要が知られるに過ぎない。しかしながら、歌川国芳の錦絵『浮世絵又平名画奇特』と比べ、黒船かわら版は明らかにわかりやすい。「黒い巨大船が浦賀に来航した」「船はアメリカ国から来た」「蒸気で動く船である」「マストが三本もある」といった情報の核心部分は、いくつかのかわら版を見ることでわかってくるのである。

おわりに 黒船かわら版後

二度にわたるペリー艦隊の来航、和親条約の締結そして開港は、幕末政治史における一大事件であり、武士階級のみならず庶民にも衝撃をあたえた。しかしながら、江戸幕府や諸藩は当時の庶民に対し、公式発表を行なう義務を全く負っていなかった。異国船は何処から、いかなる目的を持ってやって来たのか、などの情報は一切公表されなかったのである。したがって庶民は、非日常的事件の情報を自分で獲得するしかなかった。

黒船かわら版は、制作者の間で剽窃や転写が繰り返され、数百種類が作られた。それらの黒船かわら版群には「江戸近海にアメリカから黒色の船が来た」「蒸気の動力で動く巨大船である」「側面に多数の大砲を備えている」「幕府も沿岸防備を行なっている」といった、揺るぎない核心的情報が込められていたのである。しかしながら、かわら版によって到達しうる事実には限界があったこともいうまでもない。

黒船かわら版の情報は、当時の人々にとっても図像は類型的で文字情報も不正確であり、内容はかわら版制作者が知りうる範囲に止まっていた。したがって人々は、自らの社会的地位に基づく情報収集網、例えば商人の商品流通ルート、村落名主層による公的ネットワーク¹³⁾、中・下級武士層の藩内での情報入手、武家と使用人のあいだでの伝聞¹⁴⁾など、口頭や書状による事件の情報入手を試み、黒船かわら版の情報精度を高めたと考えられる。

ところで、黒船かわら版が頻繁に出されたころ、武士の間では肉筆の「黒船絵巻」が多数作られたことが知られる。本職の絵師によって描かれた逸品もあれば、絵心のある武士によって描かれたと推測される、拙いながらも味のある描線の作品もある。¹⁵⁾これらは、武士階級の間で転写が繰り返されたと推測されている。卷子状の絵画であるため、少しずつ巻き取りながら見るか、大きな部屋で広げて全体を見なければならぬため、一枚摺のかわら版と違って閲覧は簡単ではない。黒船かわら版の図像には、黒船絵巻に描かれたものと似た図像もあり、武士階級の収集した情報の一部がかわら版に流れた可能性も指摘されているものの、立証は難しい。武士のあいだで蒐集された情報の一部が流出し、庶民向けのメディアであるかわら版となって情報源として流通したならば、武士から庶民への、階級を超えた情報交流の事例として興味深い。今後も図像・文章情報両方の調査が必要であろう。

¹³⁾ 岩田みゆき「村落上層民の異国船情報収集活動—大久保家の場合」『幕末の情報と社会変革』(2001)収録、など。

¹⁴⁾ 武家使用人による情報収集の実態については(石山2002)に詳しい。

¹⁵⁾ 黒船絵巻に関しては(大久保監修1988)

非日常的事件が起きたこと自体が、公権力から一切伝達されなかった近世社会のなかで、黒船かわら版は、ペリー来航（1853年6月）と翌年の再来航、さらには開港という大事件に対応し、時々刻々と状況を伝えていった。黒船かわら版は、類型的な画像と不正確な文章情報ながらも、歌川国芳の『浮世又平名画奇特』のような「判じもの」とは異なり、遙かにわかりやすいメディアであった。外交に関わる政治的情報が印刷物となり、図像と文章によって事件がわかりやすく伝達され、膨大な数の庶民に継続的に読み解かれたことは、画期的であった。

数百種類の黒船かわら版は、多くの人々に買われ、購入者の数倍の人々に回読されたと推定される。ペリー来航事件への関心の高まりにともなって次々と黒船かわら版が出され、事件の推移は継続的に関心を持たれ、読み解かれていったのである。火事や地震といった、数日から数ヶ月で終息する話題とは異なり、ペリー来航とその後の混乱は数年にわたるものであった。黒船かわら版のブームはきわめて大きな盛り上がりを見せた、情報獲得・情報解読行動であったと考えられよう。

このように、黒船かわら版のあいまいな情報から、より精度の高い事実に近い情報に迫るべく、各階層の内外で情報獲得行動¹⁶⁾が活性化した。そして、庶民までもが獲得した情報を分析活用し、次代の政治勢力として成長するというシエーマは、宮地正人氏のいう「公論」世界¹⁷⁾の成立としても理解できる。しかしながら、全ての人々が政治的な世界に積極的に参加したのではなく、平穏な日常生活を維持するため、情報を積極的に収集・利用したのではないか。今後は画像情報と文章情報のより詳細な考察、地方の日記類などに記された黒船来航情報との照合により、黒船かわら版の情動的役割と、その行く末を解明したい。

<参考文献>

林英夫

1985『『読売り・瓦版』の世界』『歴史評論』113号

保谷徹編

2001『幕末維新論集 10 幕末維新と情報』吉川弘文館

石山秀和

2002『幕末期における旗本用人の情報入手とその伝達』『洋学研究誌 一滴』第10号、津山洋学資料館

岩下哲典

2000『幕末日本の情報活動 「開国」の情報誌』雄山閣

岩田みゆき

2000「情報ネットワーク社会の胎動」大石学編『江戸時代への接近』pp 101-112、吉川弘文館

2001『幕末の情報と社会変革』吉川弘文館

ジェラルド・グロマー

1995『幕末のはやり唄 口説き節と都々逸節の新研究』名著出版

北原糸子

2003『近世災害情報論』塙書房

¹⁶⁾ 幕末期の地方における情報獲得行動に関しては（太田 1991、のち保谷徹編 2001 に所収）、前出（岩田 2001）を参照のこと。また近世史における情報研究の動向については（岩田 2000）111-114 頁、（高部 2002）が詳しい。

¹⁷⁾（宮地 1993）参照。

木下直之・吉見俊哉編

1999『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学出版会
小西四郎監修

1995『図説 黒船の時代』河出書房新社

町田市立博物館

1986『展示図録 かわらばん展』町田市立博物館

南和男

1997『江戸の風刺画』吉川弘文館

宮地正人

1993『風説留からみた幕末社会の特質—『公論』世界の端緒的成立』『思想』第831号

2004『摺物—情報伝達の方法』『歴史をよむ』東京大学出版会

中山榮之輔編

1974a『かわら版集成』柏書房

中山榮之輔

1974b『江戸明治かわらばん選集』人文社

大久保利謙監修

1988『黒船来航譜』毎日新聞

太田富康

1991『ペリー来航期における農民の黒船情報収集—武蔵国川越藩領名主の場合』『埼玉県立文書館
紀要』五号

斎藤多喜夫

1986『長崎から来た黒船—開国期瓦版の海外情』『たまくす』4号、横浜開港資料館

高部淑子

2002『日本近世史研究における情報』『歴史評論』No. 630

富澤達三

2004『錦絵のちから—時事的錦絵とかわら版』文生書院

横浜開港資料館

1997『横浜開港資料館所蔵かわら版・浮世絵目録（平成8年12月末現在）』横浜開港資料館

2004『ペリー来航と横浜』横浜開港資料館

横浜マリタイムミュージアム

2002『企画展 ペリー来航前後の江戸湾の海防』横浜マリタイムミュージアム

吉原健一郎

1999『落書というメディア』教育出版

1978『かわら版新聞—江戸・明治三百事件 I～IV』平凡社

The *Kurofune Kawaraban* and Before

〈Summary〉

Tatsuzo Tomizawa

1. *Kawaraban* in the Edo Period

In the last days of the Tokugawa Shogunate, many kinds of *Kawaraban* (used as News sources of the commonalty) were published in the metropolis like Edo and Osaka. In the past, it was said that the oldest *Kawaraban* prints were published in the days of the Osaka War (1615), but the recent research has brought a new theory that they were made in earlier period.

Kawaraban had several distinctive features.

- news were their main contents
- people paid money to read them
- instant prints
- publisher was anonymous
- no fixed format and low quality prints

There were many kinds of news printed in the *Kawaraban* such as catastrophe (fire, earthquake and eruption), murder cases (*Katakiuchi* (vengeance) or Shinju (double suicide)), strange incidents (appearance of monster or ghost), and the arrival of the foreign ships called *Kurofune*. The Edo-bakufu strictly prohibited production and selling of the prints that dealt with such topics. But in the end of Edo-era, enormous amount of public prints were produced for the mass while the censorships by Edo-bakufu became nominal, and *Kawaraban* were published openly. In particular, big fires broke out frequently in Edo and the *Kawaraban* often reported their damages. The disaster information of the *Kawaraban* was relatively credible, and therefore served to calm people's fears and also transmitted the situations of the damages from Edo to provinces.

2. *Kawaraban* of Black Ships (*Kurofune Kawaraban*)

In 1853 (Kaei-6), Admiral Perry voyaged to Uraga, and urged Japan to start commerce. Edo was thrown into an uproar, and hundreds of *Kawaraban* which informed this incident were produced. These "*Kurofune Kawaraban*" told the people the circumstance by the stereotypical images and some factual information. The *Kurofune Kawaraban* were non-censored illegal prints, and many of them were one-sheet-type. It was rare that such printings containing political information were published in a large quantity and were purchased by the general public. In this paper, I will analyze the image of the *Kurofune Kawaraban*, and examine their roles in the public world.